



新村出全集

第八卷

筑摩書房

新村出全集第八卷

昭和四十七年一月三十一日 第一刷発行
昭和五十二年五月三十日 第二刷発行

著 者 新 村 出

担当編者 池 上 禎 造
新 村 徹

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八
井 上 達 三

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号 一〇一―九一
電話 東京 〇七六五―(代表)
振替 東京 六一四―二三番
印刷 多田印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

書誌典籍篇Ⅰ 目次

典籍叢談

7

序 9 再刊本に序す 11

紀元節所感―神武天皇御製饗宴和歌新解― 13 『校本万葉集』の公刊をことはぎ

て 18 『万葉集』と『遊仙窟』 22 『万葉集』品物研究の一資料 25 「万

葉学年報」に関する卑見 28 『万葉集』の欧訳 31 古謡研究上の新資

料 35 『新謡曲百番』 38 『徒然草』の和へ物 41 欧洲に伝はつた『和

訓栞』 43 『静岡県方言辞典』序 52 セイス教授を送る―その『言語学入門』

の思出― 54 山口茂一君訳『ルードネフ蒙古文典』序 59 阿満得寿氏『梵

文読本』序 61 上田君の思出 62 上田君の遺稿をさぐりて 65 故上

田敏博士のダンテ翻訳 71 図書館に関して内田博士の追想 74 厨川博

士の追憶より鎌倉懐古へ―オーマル・カイヤムの『四行詩篇』の事など― 80 原博

士の追懐につきて『顔氏家訓』の事ども 86 桑木氏の『哲学と文藝』を

読みつゝ 92 「藝文」ヘッベル号を読んでから 96 炬火紅 100 行雲 114

秋海棠 119 『明治以前洋画類集』序 122 『大日本貨幣史』序 123 日英

関係図書展観志124 横山由清の『魯敏遜漂行紀略』158 『デカメロン』
 の邦訳本162 モンタヌス『日本誌』―和田博士の訳註―166 鼠賊礼讃170 要
 法寺版の研究174 『選択集』古版本考188 『選択集大観』跋201 我国旧
 時の活字本203 葵文庫と駿河文庫213 今川氏時代駿州古刊書志227 兵
 庫の古版本について231 柱下漫語237 南北朝時代の金沢文庫240 水
 府紀行のうちより―彰考館の金沢本など―248 芸亭院と賀陽豊年251 石上
 宅嗣の芸亭につきて258 日本往古の図書館概観268 唐宋版本雑話271

典籍散語……………

例言 281

サトウ氏の『日本耶穌会刊行書志』284 バジェスの『日本図書目録』288
 吉利支丹本三種解説―『妙真問答』と『破提字子』と『顛偽録』―290 『吉利支丹
 叢書』解説294 彰考館所蔵の吉利支丹関係図書300 『天草版異本どち
 りな・きりしたん』304 『天草本平家物語』325 日本耶穌会出版『太
 平記抜書』解説328 村岡典嗣氏の『吉利支丹文学抄』329 浜田青陵博
 士の『天正遣欧使節記』跋文330 『切支丹鮮血遺書』改版序文332 日
 本吉利支丹版本の回収334 南蠻本の回収338 日本吉利支丹版本の新発
 見―慶長五年活字本の『倭漢朗詠集』―342 吉利支丹版稀書の回収344 撰政

- 宮台覧の吉利支丹遺物 346 『新約聖書文献考』序 351 豊公宛南蠻古文
 書の新発見 353 『南蠻長崎草』序 358 長崎情致の流行―『長崎南蠻紅毛史
 跡』― 361 『墨国漂流記』 364 フォレンタイン『日本志』 365 大槻如電
 翁の『新撰洋学年表』 368 小関三英の訳書『那波列翁伝』 371 ヴェラ
 スケスの時代とその画風 375 『万葉集新考』を読む 380 『西南文運史
 論』序 383 『契沖全集』新刊所感 385 増訂『賀茂真淵全集』小引 386 真
 淵の語字に就いて 387 『金鈴遺響』 389 『南京遺芳』を読む 391 佐
 々木博士の『百代草』 393 『日本文学大系』序 398 九条夫人の『洛北
 の秋』 400 素子さんの歌集『窓』 402 デ・ロース氏『阿蘭陀詩抄』小
 引 406 竹内勝太郎氏の詩集『室内』跋語 408 水原堯栄師『高野版之研
 究』題言に代へて 410 『詩の形態学的研究』小序 412 逍遙博士より得た
 る感銘 414 『小泉八雲全集』の刊行を聞きて 421 上田敏博士遺著『現
 代の藝術』序 422 『上田敏全集』の刊行に際して 424 宇治にて『類聚
 歌林』を搜索せる話 426 扇風機 427 駿国書史贅語 429 最近の読書 433
 海洋文学書の蒐集―神戸読書界に対する希望― 436 読書漫談―偶然発見した「カテ
 キ」の本体など― 440 新秋読書録 442 新刊良書推奨 445 『新聞に入りて』
 を読みつつ 446 社会人としての感謝―『日本家庭大百科事象』を見て― 448 足
 立博士の大著―世界に誇るべき『軟部人類学』― 451 古書の保存と図書館 454 竹

林熊彦氏訳ビショップ『図書目録綱要』序文	458
『慶長以来書買集覧』	
序	461
版本備忘録	464
晩学書志	470
書物藝術上のキリアム・モーリスと本阿弥光悦	480
津田青楓氏『装幀図案集』序文	490
書物の工藝	493
工藝品としての書物	496

海表叢書抄

例言	501
再序	503
解説	504
跋語	570
『海表叢書』の名について	571
『海表叢書』の表紙に就いて	573
海表漫筆	574
海表懺悔録	577
海表一喜一憂	579
海表後語	581
『異国情趣集』例言	583

単行本未載篇

琉球語の『聖書』	587
『訳詞長短話』解説	588
近世文化史料と九州の図書館	589
書物の因縁	596
京都における蘭学書について	600
『枕草紙』の英訳	604
『西欧における日本文学』	606
典籍の災厄に就いて	608
金沢文庫再訪記	613
南洋の船上より	616
定家卿所伝本の『金槐和歌集』	619

解説

池上楨造
新村徹

新村出全集 第八卷 書誌典籍篇Ⅰ

典籍叢談

序

岡書院主人來つて予が典籍に関する感想論考の既に世に現はれたるもの若干篇を一書にまとめて刊行せむといふ。是に於て、予が或は事に触れ興に乗じて綴りたるもの、或は叙述を悉くしたるもの、考証を専らにしたるもの、或は唯旧聞を録したるもの、稍新見を表はしたるもの、凡て十数年来印行したりし、典籍に因みある蕪文約五十篇を摺拾する事とせり。即ち、偶読せる新著の紹介あり、閑却せる古版の顕彰あり、亡友を悼みて愛読の書に及びしあり、古典に拠りて試に異説を立てしあり、往時の文庫を記るしては、穿鑿に陥りしと概略に失せしとを問はず、又時代の偏せると地方の局せるとを論ぜず、網羅刺す所なからむとせり。省みれば、統一なく、指帰なく、漫筆多くして攷究乏しきを憂ふれども、此の鶏肋の一冊、著者として毎篇着想の當時を追懷するに、赧然おのが未熟と幼稚とを覺りて之を搔破らむといらだつよりも、執着の念、未練の情、いづれも棄てあへぬもののみなるに堪へざらむとす。例へば、巻頭に掲げし「紀元節所感」の一節の如き、十有五年前のうひうひしき感想の、今にして自ら之を讀むに、文中論考の適否はさておき釋氣の溢れたるに羞ぢ、時勢の変の急なるに驚かるれど、独り當時を憶ひては呆然夢見ごこちす。いはば一家の写真帖を打ちながめつゝ、幼少壮老その折々の姿を見つけて、かれにこれに、面はゆげさを覺えつゝも、わがいたづらざかりの面影を偲ぶよすがにもと、そを破りする能はざるに似たらむかし。かくて世の学徒のそしりは忍びても、寧ろ吾が情緒の迹をとこしへに留めばやなど思ひつゝ、遂にこの一冊を編みをはりぬ。さるにても、柳田国男氏の懇渾なかりせば此の一書は成らざりけむことを思ひ、岡茂雄氏がかゝる蕪文

なる編著の出版に際して、とあれかくあれと体裁につきて懇篤に気を配られしことを感じ、且つ藤堂祐範氏が剪裁に筆写に校正に最も力を加へられしことを銘し、茲に三氏の厚意を録すると共に、狩野直喜博士がこの一小冊子に題簽を書与へられしと、佐々木信綱博士が『梁塵秘抄』の写真につきて心を致されしと、併せて二博士の芳情を深謝す。挟入せる写真は新奇陳腐相雜り、而も原本の採択意の如くならず、尚ほ直接に原本より撮影するの暇なかりしもの少からざりしを以て図面往々鮮明を欠くものある等、編者の大に惜恨する所なり。挿図には聊か参考に資せむとするものと、単に情致を添へむとするものとの兩種あり、今一々解説を附するの煩を省きたれば意味曖昧に見ゆるものなきにあらじ。覽む人々の賢察を乞ふ。

大正十四年九月一日

殊に典籍の災厄亡友の上など想起しつゝ

京都大学図書館の一室に於て

新 村 出

再刊本に序す

『典籍叢談』の再刊とは私の夢にも想はなかつた所であつたが、昨年来、わたくしの客寓せる一橋会館に近き星文館主人萩原一男君の希望によつて此の本が新装世に見はれるやうになつたのは、愛着の念深き著者として喜悅の情亦一入である。前刊本の序文は、大正十二年九月の典籍の災厄から正に二年目に、多年在職中の京都帝国大学図書館の館長室において、典籍の運命を嘆ち、また亡友の追懷にひたりつつ筆を執つたのであつた。爾来二十年にも近づかんとして、その間多少読者の興味をもそそり、書誌学界に幾分の補益にもなつたやうで、永らく絶版のままになつてゐるのを惜む人もないではなかつた。然るにこのほど萩原君の篤志によつて再版の機会を得たのは、決して因縁と意義のないことではない。

再刊については、単に誤植を正す程度の補修にとどめ、敢て根本的な増訂を施さなかつたのは、一つには時局下における印刷の障礙をも慮つたのであるが、正直を申すと、老来その煩に耐へかねる為である。読者の寛恕を冀ふより外はない。旧版には、長々しい序文を添へて、出版由来などを詳記したが、今は無用に近いから省略した。ただ旧出版者岡書院主人の岡茂雄君が、出版業の開始初期に、この本を刊行してくれたときの篤実と努力とを回顧したりすると、転たなつかしさに堪へなくなる。その岡君と懇親なる萩原君が、わたくしの小著ばかりでなく、岡書院発行の名著良著をば向後続々継紹刊行せんとしつゝあることは、恊に昭代の余沢によるものとは云ひながら、近年における出版界の一大慶幸と讃しても、決して過言ではないのである。

最後に懺悔すべきは、前刊の本には、口絵として「司馬江漢の銅版」と銘せる歐洲の古文庫の画図を掲げておいたが、あれは偽作を購入した私の痴愚によるもので、私は時々反古紙の束の中から、あの卷子が出てくると、独り苦笑しては破りも棄てずに懐旧の念に堪へぬを常とする。何か代りに口絵にしたいと苦慮したが、遂に求め得なかつたのは遺憾である。

昭和十八年五月十五日あさ

一橋の客舎にて警戒管制のもと、希くば万一の空襲下に典籍の不運なかれかしと祈りつつ識るす

新 村 出

紀元節所感

— 神武天皇御製饗宴和歌新解 —

吾等が年々歳々迎ふる紀元節の中で、本年（明治四十四年）の紀元節は種々の意味に於て、特に記念すべく又感想の甚だ深い紀元節である様に思ふ。他事は措き先づ第一韓国を併合して以来最初に迎へた神武天皇御即位の祝日であることは何人も容易に心附いた所であらうと信ずるが、自分も亦昌平の民たる仕合には、世の読書家と共に古史を繙いて此の祝日を記念し、聊か感想を述べて見たいのである。

『記』『紀』の二典を案するに、神武天皇が八咫鳥の嚮導に由つて、山越をして吉野から宇陀へ北進なされた時に、宇陀を領して居た魁帥の一人兄宇迦斯の為に御危難に遭はせられようとした条がある。其の際兄宇迦斯は、逆心を藏し乍ら頭に降参して、大殿を造つて其の内に押機を設け危害を玉体に及ぼし奉らうとした所が、御運目出度謀略は早くも看破され、剩へ工んだ賊魁自身が其の機械に触れて身を亡ぼしたと云ふ、今に始めぬ艱面な話がある。其処で天皇は大饗宴を開かれて皇軍の士卒を勞ひ給ひ、来目歌と云ふのを高吟遊ばされた。其の御製の初数句は、

宇陀の古城に

鳴套張る、

己が待つや

鳴はさやらず、

勇細し

鯨さやる、

とあつて、甚だ明白な比喻を以て兇戯に類する賊魁の企図の失敗に終つた事を諷詠された。即ち鳴の如き小鳥を捕ふるに供する罌を仕掛けて待つて居た所が、所期と違つて勇猛巨大な鯨鯢にも比すべき皇軍に出会つて、事全く破れたと云ふのが普通の解釈で、一応事理聞えるけれども、「いすくはし、くぢら」の文句に至つては、古来異説も存し、殊に冠辭の「いすくはし」は難語の一つとして取扱はれた程で、序ながら茲に此の記念日を機として別解を附加へるのも無量の業では無からうと考へる。

記紀時代の発音として「くぢら」を鯨魚とする一般の説は尤もな考へであつて、一通り調べて見た所では、契沖の『厚顔抄』、真淵の『冠辭考』及び『日本紀和歌略註』、宣長の『古事記伝』、久老の『日本紀歌解』、土清の『倭訓栞』及び『日本紀通證』、秀根の『書紀集解』、守部の『稜威言別』及び『山彦冊子』等、孰れも同様な解釈であるが、独り度会延佳が「くち」を「仁徳紀」の俱知、即ち鷹の義に解し、「ら」を助語と見做したのは、谷川翁も採らず、又梟居翁も論難余す所無き許りであつて、爾來殆ど一顧をも得なかつた旧説であるにも拘らず、自分は之を一解として取所のある説と考へて居る。鳥網に鯨と云ふ様な山海無差別の取合せは、或は技巧として或は奇想として或は俳味として有得べき趣向ではあるが、上古の着想としては寧ろ不自然に近い。「武烈紀」の影媛の歌に類例の存するのを引いて「上代の意却て茲に在り」と弁護した真淵の考へも見えたが、矢張自然の連想に遠いと云ふ感が起る。大饗の御饌中に、鴨と鯨の肉が有つたので、御製に入つたものだと思ふ外なしと穿つた宣長の思附は少し妙ではあるまいか。「山くぢら」即ち野猪と釈して難関を切抜けようとしたアストンの奇説は、今年の亥歳に因んで爰に書添へる丈の愛嬌を恕して貰ひたい。

兎も角、右御製の「くぢら」は俱知等、即ち鷹と釈する方が自然であることは争はれまい。俱知とは、神武天皇よりも凡そ一千有余年も後だと云はれる仁徳天皇の御代に国語に入つた百濟の語であつて、我が国に於ては、『日